

金融経済論

石田 定夫

私の担当は「金融経済論」であるが、商学部では「金融論」という講座名である。「金融経済論」と「金融論」は、どこがどう違うのか、必ずしも明らかではないが、私は私流にやろうと思っている。

ひと昔前、私の学生時代のことであるが、「そもそも大学は学問のうんのうを極めるところであり、大学の講義は実際にあまり役立たなくてもよいのだ」という考え方がよくきかれた。しかし、これは文字通り学問のうんのうを極めた大先生の言であって、私ごとき新参者（本年でようやく5年目）には、そんなだいそれたことを言う自信はない。むしろ「金融経済論」は1つの実学であり、現実を離れてはいけないと思う。

「金融経済論」の講義では、「日本の金融機構」を中心テーマとして、金融制度、金融市場、資金循環、金融政策、国際金融などの諸問題をとりあげている。講義にあたっては学生が興味をもってくれるように、折にふれ時事問題を引用し、「理論と実際のバランス」の調和に心掛けている。私が学生に望みたいのは、金融についての細かい事実関係を覚えることよりも、現代経済における金融全体の仕組み、あるいは経済と金融の関係についての大筋を的確に理解し、自分の頭で金融経済の問題を考える力をつけることである。新聞や雑誌に報道されている金融関係の重要な記事についても、まずその意味を理解し、自分なりの考えをもつことが必要だと思う。私の講義の念願は、学生諸君にそういう力をつけることにある。

さて昭和50年代の日本経済は低成長期に移り、それに国際化の波も進み、金融面でも資金の流れに大きな変化が生じたが、こうした動きは今後とも続くものと思われる。われわれ金融経済論を学ぶものにとって、これは生きた研究の対象であり、現在こそ研鑽を積む絶好のチャンスである。まさに血湧き肉躍る

といった感じである。新学期を迎え、心を新たにして学生諸君にアピールする
講義をしたいと思っている。